

序

わが歴史地理学会ではすでに紀要第一九号に「都市の歴史地理」を、さらに第二〇号に「村落の歴史地理」を刊行した。それらには集落社会としての都市および村落について、それぞれの問題点を多方面から考察する多くの論考が発表されている。それらをも、またこれら以外の各号に載せられている他の論考においても、都市あるいは村落を対象とする考察の多くが、都市は都市だけ、村落は村落だけに終ることなく、両者の相互関連について触れられているものが多いことに気付く。これは当然のことであって、解題において田村正夫氏も論じられているように、都市はその発生当初からその周辺地域の都市圏や近隣の村落と関係なく存在するということは古今東西いずこにおいてもありえないからである。

私事であるが筆者もかなり以前から同様の考え方で都市圏に関する論考をいくつか発表してきたが、それらには現状分析だけに終わっているものもある。しかし「地域中心としての都市」とか、「都市圏」の問題について深く論議を進めて行けば行くほど、後には歴史地理的見地から考察することの重要性を痛感するようになった。これは筆者が段々年をとったからであろうか。けだし現状をいくら精細に分析してもそれだけでは決して十分ではなく、たとえぼすでに消えてしまった前代の事象が後代の地理的事象につながり、その要因をなしているような場合がしばしばあるので、このような地理と歴史のからみ合いを明らかにすることはきわめて重要なのである。

本学会では昭和五八年四月の第二六回大会において「都市・村落関係の歴史地理」を共同課題として研究発表が行なわれた。この紀要第二六号にはその時の発表のうちから九篇を集めて掲載した。これらの論考は近世以後、明治・大正期頃までのものが多いが、こうして集録してみると改めて都市・村落関係がきわめて深く、しかも決して単純ではないことに気付かされる。

歴史地理学の研究には資料的制約が常に伴うのであるが、わが国の古代や先史時代についても僅かな埋蔵文化財の発見とその精緻な分析を、広く大陸方面の史料と結びつけて多面的な研究を進めることによって、従来は全く考えられなかったような新しい展望を切り開くことも行なわれるようになってきている。まして近世や、とくに明治以後などについては資料はきわめて豊富であり、やるべき仕事はいくらでもある。本号につづいて今後も同様なテーマについての研究が一層発展することを期待してやまない。

本紀要の刊行に対して畠山文化財団から多額の助成金を与えられたことを付記し、謝意を表す。

一九八四年一月

高野 史男